

美しさと哀しみと

川端康成

中央公論社

美しさと哀しみと

昭和四十年二月二十日初版発行
昭和四十年四月二十日四版発行

著 者 川 端 康 成

装幀挿画者 加 山 又 造

発 行 者 宮 本 信 太 郎

印 刷 者 白 井 倉 之 助

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一

電話五九二一一九

振替東京三四

定価 五九〇円◎

検印廃止

〈精興社・協和製本・加藤製函〉

美しさと哀しみと

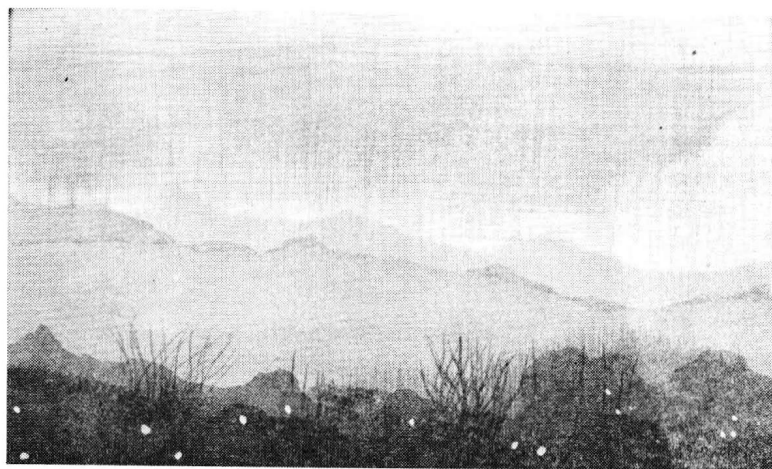
除夜の鐘

東海道線、特別急行列車「はと」の展望車には、片側の窓ぎわにそって、五つの廻転椅子がならんでいる、その端の一つだけが、列車の動きにつれて、ひとりでに静かに廻っているのに、大木年雄は気がついた。それに目をひかれるとはなせなかった。大木の腰かけているがわの低い肘かけ椅子は動かぬもので、これらはもちろん廻転出来ない。

展望車のなかに大木ひとりであった。大木は肘かけ椅子に深くもたれて、向うがわの廻転椅子の一つが廻るのをながめていた。きまった方向にきまった速度で廻っているというのではなかった。少し早くなったり、ゆるやかになったり、ときどき止まったり、また逆の方へ廻ることもあった。とにかくしかし、客車に大木ひとりだけの前で、廻転椅子の一つだけがひとりで廻るのを見ているのは、大木の心のうちのさびしさを誘い出し、いろんな思いをゆらめかせた。

暮れの二十九日である。大木は京都へ除夜の鐘を聞きに行くのだった。

大木が大晦日の夜に、ラジオで除夜の鐘を聞く習わしは、もう幾年つづいただろうか。この放送が何年前か



らはじまったか、おそらくはそれ以来、欠かさずに聞いたのではなからうか。日本のあちらこちらの古寺の名鐘の音を聞かせながら、アナウンサアの解説が加わる。この放送のうちに、古い年はゆき新しい年が来るのだから、アナウンサアの言葉も美文調となり詠歎調となりがちである。ゆっくり間をおいて撞きつづける、古い梵鐘の音、その残りのひびきには、時の流れを思う、古い日本のさびがある。北国の寺の鐘が鳴ると、つぎには九州の鐘を聞かせるといふ風だが、いつの除夜も、京都の寺の鐘で終るのだった。京都は寺も多いし、幾つかの寺の鐘がひびき交わして、ラジオにはいることもあった。

除夜の鐘の放送の時刻、妻や娘は正月の料理で台所にいたり、片づけものをしたり、あるいは着物をそろえたり、花を生けたりで、まだ立ち働いていても、大木は茶の間に坐って、ラジオを聞いていたものだった。除夜の鐘につれて、大木は過ぎ去ってゆくその一年を振りかえらせられる。感慨をもよおす。その感慨は年によって、激しいこともあれば、苦しいこともある。悔いやかなしみに責められることもある。アナウンサアの言葉や声の感傷が、いやになる時があっても、鐘の音は大木の胸に



ひびきこんだ。そしていつか一度は、おおつごもりに京都にいて、ラジオを通してではなく、古い寺々の除夜の鐘をなまで聞いてみたいものと、前々から心誘われていた。

それがその年の暮れ、にわかに思い立って、京都行きとなったのだった。京都にいる上野音子に長年ぶりで会い、ともに除夜の鐘を聞いてみようという、むほん心も動いた。音子は京都に移ってから、大木とはたよりもほとんどだえているが、日本画家としてこのごろは一家をなし、今もひとり身で暮らしているらしかった。

急な思い立ちではあるし、あらかじめ日をきめて特別急行券を買っておくなどは大木の性分に合わないので、横浜駅から急行券なしで「はと」の展望車に乗りこんだ。暮れに迫って東海道線はこんでいそうだが、展望車なら老ボオイもなじみだから、なんとか席を取ってくれるだろうと思えた。

「はと」は行きの東京、横浜をひる過ぎに出て、京都へ夕方に着くし、帰りの大阪、京都もひる過ぎに出るので、朝寝の大木には楽で、京都の行き帰りにはいつもこの「はと」を使って、二等車（一等、二等、三等のあったころの二等車）の受持ちの

娘たちも、大木はたいい顔見知りになっていた。

乗ってみると、二等車も案外すいているようだった。暮れの二十九日というと、乗客の少ない日なのかもしれない。三十日、三十一日はまた立てこむのだろう。

廻転椅子が一つだけ廻るのをながめつつけるうちに、なんとなく「運命」についての考えに沈みこみそうになりかかっていた大木のところへ、老ボオイが煎茶を運んで来た。

「僕ひとり？」と大木は言った。

「はあ、五六人さまはいらっしゃいます。」

「元日はこむかしら？」

「いいえ、元日はすいております。元日にお帰りでございますか。」

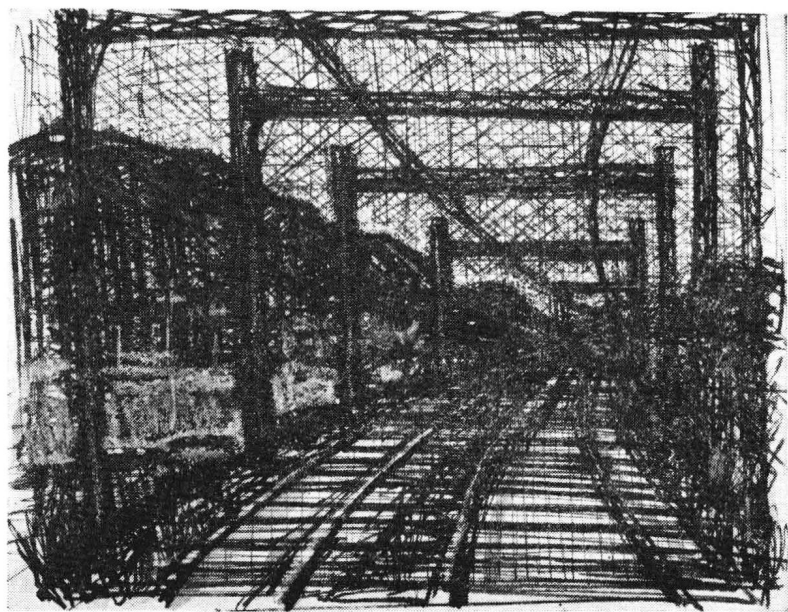
「そう、元日には帰らないと……。」

「そのように連絡いたしておきます。元日は私は乗務いたしません……。」

「頼みます。」

老ボオイが行ったあとで、大木はあたりを見まわすと、はずれの肘掛椅子の裾に、白い革のカバンが二つおいてあった。真四角のやや薄手な新しい形だった。白い革は淡い茶色をおびたむらがあって、日本では見かけない、上質のものだった。また、椅子の上には、豹の皮の大きいハンド・バッグがおいてあった。荷物の主はたぶんアメリカ人だろう。食堂へ行っているらしい。

窓のそとはあたたかな濃いもやのなかに、雑木林が流れていた。もやの上の遠い白雲に微光があった。それは地上からさす光であるかのように見えた。しかし列車の走るにつれて晴れて来た。窓の日ざしが深く床に



はいった。松山のそばを通ると、いちめんに散り松葉が見えた。一むらの竹の葉が黄ばんでいた。黒い岬に光る波が打ち寄せていた。

食堂からもどった、アメリカ人の二組の中年夫婦は、沼津を過ぎて富士山が見え出すと、窓に立ってしきりと写真を撮うつした。しかしやがて富士が裾野まですっかり姿をあらわしたころには、うつしつかれてしまったらしく、窓に背を向けていた。

冬の日が暮れかかるのは早く、どこかの川が鈍い銀鼠色ぎんねいろなを見送って、大木が顔をあげると、落日と向い合った。やがて黒雲のなかの弓形のすきまから、白い残光が冷めたくもれて、これは長いこと消えなかった。とくに明りのついた車内では、なにかのはずみで廻転椅子がいっせいに半廻りした。しかし、止まらずに廻りつづけているのは、やはりはしの一つだけだった。

京都に着くと、都ホテルへ行った。宿へ音子の

来ることがあるかもしれない、と大木は思うから、静かな部屋をと望んだ。エレベエタアで、六七階までのぼったようだが、このホテルは東山の急な傾きに段々と建っているの、長い廊下を奥へ渡って行った先きは、一階なのだった。その廊下にそうした部屋部屋には、まったく客がないのか、しんとしていた。ところが、十時過ぎに、両側の部屋が外人の声でにわかに騒がしくなった。大木は受持ちのボーイにたずねて見た。

「二家族ですが、お子さんが両方で十二人です。」とボーイは答えた。十二人の子供たちは部屋のなかで声高に話すばかりでなく、おたがいの部屋を行ったり来たりして、廊下を走り、はしゃぎまわった。部屋はいくらでもあいているはずなのに、なぜ大木の部屋をはさみ討ちに、こんなにぎやかな客を通したのか。しかし、子供のことだからやがて眠るだろうと、大木はたかをくくっていたが、子供たちも旅で気が立っているのか、なかなか静まらなかった。ことに子供が廊下を走る足音は耳ざわりだった。大木はベッドから起き出してしまった。

そして、両側の部屋の外国語での騒がしきは、かえって大木を孤独にした。「はと」の展望車で、一つだけひとりで廻っていた廻転椅子が浮んで来て、それは大木の心のなかで孤独が音もなく廻転しているのを見るかのように感じられて来た。

大木は除夜の鐘を聞き、上野音子と会うために、京都へ来たのだが、音子と除夜の鐘と、どちらが主な目的で、どちらがともなう目的なのだろうかと、改めて考えてみた。除夜の鐘が聞けることは確かだが、音子に会えることは確かではなかった。その確かなものは口実に過ぎなくて、確かでないものが心底の望みなのではなからうか。大木は音子といっしょに除夜の鐘を聞くつもりで、京都へ来た。それがむずかしくなくなえられそうに思っ出てかけて来た。しかし、大木と音子とのあいだには、長い年月のへだてがある。音子は今もひと

り身を通していろいろいけれども、だからと言って、昔の恋人に会ったり誘い出されたりするものか、大木にはわからぬのがほんとうではないのか。

「いや、あの女のことだから。」と大木はつぶやいたが、「あの女」がどう変ったか、その現在を大木は知らないのだ。

音子は寺の離れを借りて、女弟子と暮らしているはずだった。ある美術雑誌に写真が出たのを大木も見たが、その離れは一間や二間ではなさそうな、ゆうに一戸の家らしく、画室に使っている座敷も広いようだった。庭にもさびがあった。音子は絵筆を取っている姿だから、うつ向きかげんだったが、額から鼻筋はまぎれもなかった。中年ぶとりなどはなくて、やさ肩だった。この女の生涯から、妻となること、母となることを、自分が奪ってしまったのかという呵責が、昔の思い出よりも先きに、大木にせまって来る、そんな写真だった。もちろんそれは、この雑誌の写真を見る人たちのうちで、大木ひとりにだけせまるものであったろう。音子に深い縁のない人たちには、京都に移って京都風に美しくなった女画家と見えるだけかもしれないかった。

大木は二十九日の夜はとにかく、あくる三十日には、音子に電話をかけるか、音子の家を訪ねるかのつもりだった。しかし、朝、外人の子供の騒ぎで起き出たからは、気おくれがしてそれためらわれ、まず速達でも出しておこうかと卓に向ったが、書き出しから迷ってしまった。そして、部屋に備えつけの便箋の白いままなのを見ているうちに、大木は音子に会わなくてもいい、ひとりで除夜の鐘を聞いて帰ってもいいと思った。

両側の部屋の子供たちの騒ぎに、大木は早く目ざめさせられたのだが、その二組の外人家族が立って行くと、また寝入った。起きたのは十一時近くだった。

大木はゆっくりネクタイをむすびながら、

「むすんであげる。むすばせて……。」と音子が言った時を思い出した。——十六歳の少女が、純潔をうばわれたそのあとで、はじめて言った言葉だった。大木はまだなにも言っていないかった。言う言葉がなかった。背をやわらかく抱き寄せて、髪をなでているが、言葉は出ないのだった。その腕をすり抜けて、先きに身づくろいをしたのは、音子だった。大木が立ちあがって、ワイシャツを着、ネクタイをむすぼうとするのを、音子はじっと見上げていた。うるんではいるが、涙にぬれてはいない、むしろきらめき光る目だった。大木はその目をさけた。さっき接吻した時も、音子は目を開いたままなので、大木は目に唇をあてて閉じさせたものだった。

ネクタイを結んであげると言う音子の声には、少女のあまいひびきがあった。大木はほんと胸がゆるんだ。まったく思いがけないことだった。音子が大木をゆるすというよりも、今の自分からのがれるためかもしれなかったが、ネクタイをもてあそぶ手はやさしい動きだった。しかし、うまくゆかないようだった。

「むすべるの？」と大木は言った。

「むすべると思うの。お父さんがむすぶのを見ていましたから。」

——その父は音子が十二の時になくなっていった。

大木は椅子に腰をおろし、音子を膝に抱きあげると、自分もあごを持ちあげて、むすびやすくした。音子はやや胸をそりながら、二度三度むすびかけたのを解いたりしていたが、

「はい、坊や、出来たわ。これでいいのでしょう。」と膝をおりると、大木の右肩に指をそえて、ネクタイをながめた。大木は立って、鏡の前へ行った。ネクタイはきれいに結べていた。大木は少しあぶらの浮いた顔を手のひらで荒々しくこすった。少女をおかしたあとの自分の顔を見ていられない。鏡のなかへ、少女の顔が歩

いて来た。新鮮で可憐な美しさが大木を刺した。この場にあり得ぬような美しさにおどろいて、大木が振り向くと、少女は大木の肩に片手をかけて、

「好きだわ。」とひとこと言つて、大木の胸に顔を軽く寄せた。

十六歳の少女が三十一歳の男を「坊や」と呼んだのも、大木にはふしぎなことだった。

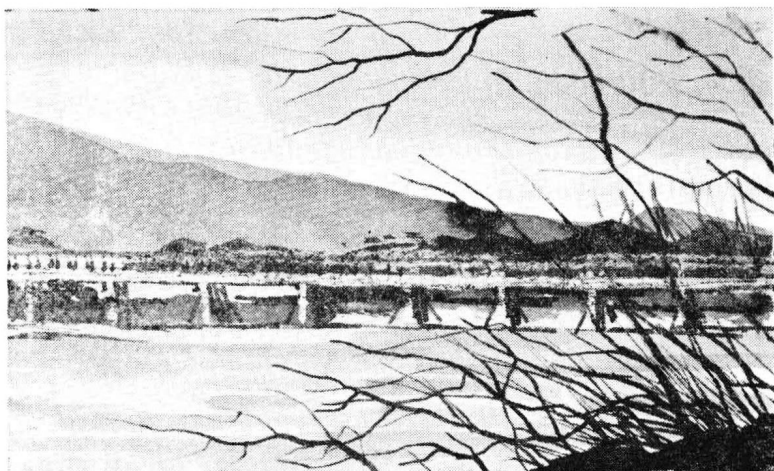
——それから二十四年たっている。大木は五十五になっている。音子は四十のはずである。

大木はバスにはいって、部屋に備えつけのラジオをかけてみると、今朝の京都は薄氷が張ったと伝えていた。暖い冬であつて、正月も暖いだろうと予報されているのだった。

大木はトオストとコオヒだけを部屋ですませて、車で出かけた。今日音子をたずねる決心はつきかねていたから、どこというあてはなかったが、嵐山あらしやまへでも行つてみることにした。車から見ると、北山から西山へかけて連なる小さい山々は、日のあたつてゐるのがあつたり、かげになつてゐるのがあつたりして、姿はいつものやさしい円まるみながら、京の冬らしく冷えさびていた。日のあたる山の日の色も弱くて夕暮れ近いように見えた。大木は渡月橋とげきょうの手前で車をおりたが、橋は渡らないで、亀山公園の裾へゆく、こちら側の川岸の道をのぼつて行つた。

春から秋まで観光の群れで騒々しい嵐山も、暮れの三十日となると、人が見えなくて、まったく様子がちがつていた。本来の嵐山の姿がしんかんとそこにあつた。淵の水はみどりに澄んでいた。筏いかだの材木を川原かわらからトラクに積む音が遠くまでひびいた。川に向いたこちら側が、人の見る嵐山の表なのだろうが、それは日裏になつていて、川上へ嵐山が傾きさがる、その山の肩からだけ日がさしこんで来た。

大木は嵐山でひっそりひとり昼飯を取るつもりだった。前に来た料理屋も二軒あつた。しかし、渡月橋にわ

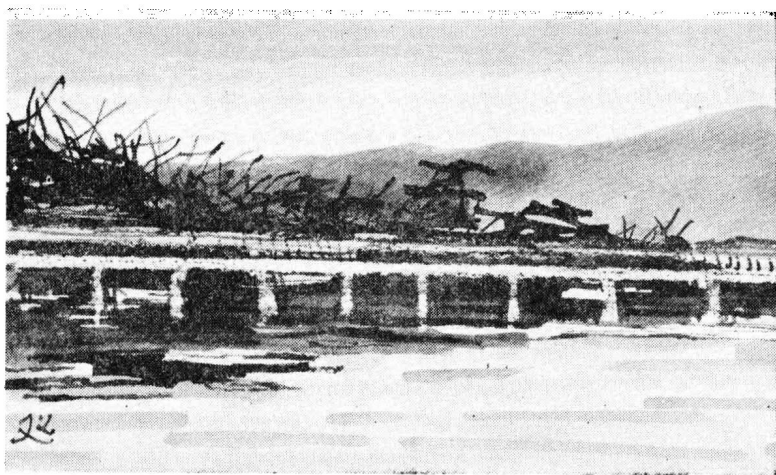


りと近い店は門の扉をとぎして休みだった。暮れの三十日に、さびしい嵐山へわざわざ来る客はあるまい。川上の昔づくりの小さい店も休みかと思いつながら、大木はゆっくり歩いた。強い嵐山で食事をしなければならぬわけもないのだった。古びた石段をのぼってゆくと、うちの者はみんな京の町へ、

「出かけてますから。」と小女^{こおんな}にことわられた。竹の子の季節に、鰯節で煮た、大きい輪切りの竹の子を、この店で食べたのは、なん年前だったろうか。大木はいったん岸の道におりると、隣りの店へのぼるゆるやかな石段の路で、婆さんともみじの枯落葉を掃きおろしているのを見た。店はやっているでしょうと、婆さんは答えた。大木は婆さんのそばに立ちどまって、静かだと言うと、

「あの向い岸のお人の声がはっきり聞えるのどすえ。」

山の腹の木立ちに埋もれたような、その料理屋は厚い茅^{かや}ぶきの屋根がしめっぽく古びて、玄関は薄暗かった。玄関らしい構えではなかった。玄関の前に竹の群れが迫っていた。茅の屋根の向うに、みごとな赤松の幹が四五本高く立っていた。大木は座敷に通されたが、まるで人けがないようだった。ガラス障子



の前に、赤いものは青木の実だった。大木はつつじの狂い咲きを一輪見つけた。青木と竹とそして赤松とが、川のながめをさえぎっていたが、葉のすきまからのぞける淵は琅玕手の翡翠色に澄み深まって、その水は動かなかった。嵐山一帯もそのように動かなかった。

大木は炭火のきつい炬燵の上に両肘をついていた。小鳥の聲が聞えた。トラックに積む材木の音が谷にこもって木霊した。

トンネルを出るのか、はいるのか、山陰の汽笛も山にひびきこもって、余韻がかなしげに残った。大木は産子のかぼそい泣き声进行い出した。——十七歳の音子は大木の子を八か月で早産したのだった。女の子だった。

産子は助かりそうもなくて、音子のそばには連れて来られなかった。死んだ時、医者には、

「産婦には、もう少し落ちついてから、おしらせになった方がよろしいと思います。」と言った。

音子の母は、

「大木さん、あなたから言っちゃって下さい。娘はまだあんな子供なのに、無理して産んだのですから可哀想で、わたしの方

がきつと先きに泣き出してしまいますわ。」と言った。

音子の母の太木にたいする怒りもうらみも、娘のお産が来て、一時おさまっていた。太木が妻子のある男にしろ、音子とその子を産むからには、一人娘の片親の母は相手の男を責めつけ、憎み通す力を失ったのだらう。勝気な音子よりも勝気らしい母も、にわかに気が折れたようだった。世間にかくして産ませ、また生まれたい子をどうするかについても、母親は太木を頼りにしなければならぬのではないか。それに妊娠で気の高ぶっている音子は、母が太木を悪く言おうものなら、死んでしまおうとおびやかすのだった。

太木が病室にもどると、音子は産婦のやすらかな、毒気の抜けた清い目を向けたが、たちまちその目に大粒の涙がもりあがって、目じりを流れ、枕をぬらした。かんづかれたと太木は思った。音子の涙は湧きあふれて、とめどがなかった。二筋三筋に流れ、一筋が耳の穴にはいりそうなのを、太木はあわてて拭こうとした。音子はその太木の手をつかんで、はじめてしゃくりあげの声をもらした。せきを切ったように泣きむせんた。

「死んじゃったの？ 赤ちゃん、死んじゃったあ、死んじゃあった。」

こう胸をもだえては、しばらくあげられて、目の涙に血も出まじりそうで、太木は音子の胸をおさえつけるように抱きすくめた。少女の小さい乳房が小さいながらに張っているのが、太木の腕にふれた。

扉の外で気はいをうかがっていたか、母がはいって来た。

「音子、音子。」と呼んだ。

音子の母をかまわないで、太木は音子の胸を抱きつづけていた。

「苦しい。はなして……。」と音子が言った。

「じっとしている？ 動かない？」